

## シンポジウム「近現代アジア太平洋文化の諸相」報告

Report on the symposium "aspects of modern and contemporary Asia-Pacific culture"

松村 茂樹<sup>1</sup>, 渡邊 顕彦<sup>2</sup>, 松田 春香<sup>1</sup>, 関本 紀子<sup>1</sup>, 木村 淳<sup>3</sup>, 黎 静如<sup>4</sup>, 利根川 千枝子<sup>5</sup>

<sup>1</sup>大妻女子大学文学部, <sup>2</sup>大妻女子大学比較文化学部, <sup>3</sup>大妻女子大学非常勤講師,  
<sup>4</sup>大妻女子大学大学院博士後期課程, <sup>5</sup>大妻女子大学大学院修士課程

Shigeki Matsumura<sup>1</sup>, Akihiko Watanabe<sup>2</sup>, Haruka Matsuda<sup>1</sup>, Noriko Sekimoto<sup>1</sup>, Jun Kimura<sup>3</sup>,  
Seijo Rei<sup>4</sup>, and Chieko Tonegawa<sup>5</sup>

<sup>1</sup>The Faculty of Humanities, <sup>2</sup>The Faculty of Comparative Culture, <sup>3</sup>Part-time lecturer,  
<sup>4</sup>The Doctor's program, <sup>5</sup>The Master's Program, Otsuma Women's University  
12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, 102-8357 Japan

キーワード：シンポジウム, 近現代, アジア太平洋文化

Key words : Symposium, Modern and contemporary, Asia-Pacific culture

### 抄録

2022年11月28日(月), 2022年度 大妻女子大学人間生活文化研究所 共同研究プロジェクト「近現代日中米文化の諸相に見る相関関係」(研究代表者:松村茂樹)によるシンポジウム「近現代アジア太平洋文化の諸相」が開催された。研究代表者・共同研究者計7名による話題提供およびフロア来場者を交えての質疑応答が行われ, 近現代アジア太平洋文化交流の実態, キリスト教の役割, 日本が果たした貢献などが見えてきた。

### はじめに

2022年11月28日(月)16:30-17:50, 大妻女子大学千代田キャンパス G311A アクティブラウンジにおいて, シンポジウム「近現代アジア太平洋文化の諸相」が開催された。これは, 2022年度 大妻女子大学人間生活文化研究所 共同研究プロジェクト「近現代日中米文化の諸相に見る相関関係」(研究代表者:松村茂樹)によるシンポジウムで, 研究代表者・共同研究者計7名による話題提供およびフロア来場者を交えての質疑応答が行われた。本報告はその記録である。

記録にあたっては, 大妻女子大学メディア教育開発センターに録画録音を依頼し, 株式会社アラジン/データグリーンに音声データを文字起こししてもらった。そして文字起こし原稿を発言者全員に修正していただき, 松村が取りまとめた。

シンポジウムにご参加, ご助力いただいた皆さんに深く感謝いたします。

### シンポジウム発言内容

松村: 皆さんこんにちは。お忙しい中, ご参集

くださりましてありがとうございます。2022年度 大妻女子大学人間生活文化研究所 共同研究プロジェクト「近現代日中米文化の諸相に見る相関関係」(研究代表者:松村茂樹)によるシンポジウム「近現代アジア太平洋文化の諸相」を開催いたします。こちらにいらっしゃる6名が, このプロジェクトの共同研究者の方々です。今回は, 1人5分で, ご自身の研究においてとくに興味を持たれている点などをお話いただき, また, 会場にお越しの方々にもご意見をいただいて, 「近現代アジア太平洋文化の諸相」について, いろいろ語り合いたいと思います。

では, 早速始めさせていただきます。私は, 松村茂樹と申します。今回の研究代表者でございます。まず, 私の方から口火を切らせていただきます。私は, 日中米の異文化交流の一断面についてお話しいたします。ここにお示ししているのは, 米国のボストン美術館に蔵されている呉昌碩(1844-1927)の「与古為徒」と書かれている扁額です(図1)。これは, ボストン美術館という世界有数の美術館に, 常設展示されているものです。



図 1 ボストン美術館蔵 呉昌碩  
「与古為徒」扁額と松村  
(2015.4.29)

呉昌碩は、「中国最後の文人」とよばれている人で、詩を作り、書を書き、それから画を描くというようなことができる人なのですが、1911年の辛亥革命により、時代が変わり、そのようなことのできる最後のひととされる方です。

この人の作品が、どうして米国のボストン美術館にあるのか？

それは当時、ボストン美術館で中国日本美術部長をつとめていた岡倉天心(1862-1913)が、当時中国上海にいた友人の漢学者・長尾雨山(1864-1942)を非常に頼りにしておりまして、1912年、ボストン美術館の鑑査委員を依頼したのです。長尾雨山は、非常に光栄に思って、何か記念品を贈りたいということで、自分が隣人として交わっていた呉昌碩に、この扁額を書いてもらい、黒漆木額に仕立てて、ボストン美術館に贈ったのです。

この「与古為徒」、訓読すると「古(いにしえ)と徒(ともがら)為(た)り」ですが、これは『莊子』という中国の古典の中にある言葉です。君主に提案するとき、古代のことにかこつけて話すと当たり障りがないという、そういった一節に見える言葉なのですが、呉昌碩は、それをもっと積極的にとりまして、自分は、古の世界と仲間になっているという精神を表したわけです。そして、この横の跋文に、ボストン美術館は、わが国の古銅器や名書画を多く収蔵しているが、このような古を好む心は、中国も外国も一緒なのではないか、さすれば仁義道徳も異なることがなかろうというように書いています。

どうして、呉昌碩は、古と仲間になるなどと言うのかというと、呉昌碩たち中国の文人のバックボーンであった儒教は、古のたとえば周の時代は、理想的な統治がおこなわれていたので、古に帰ることによって、理想的な世の中が実現できると考えるからです。ですが、米国は、発展的に新しい時代を切り拓いていくという価値観を持っていま

すから、古の方がいいなんてあまり考えないわけです。そのような状況の中で、これが送られてきて、米国の人にとってみると、自分たちとは全然違う価値観を示されたこととなります。だけど、米国の人たちは、自分たちとは価値観が違うけれども、なぜ中国の人は、こういう価値観を持っているのだろうと考え、理解しようとするわけです。このボストンに贈られた「与古為徒」扁額は、このような異文化交流を現出させました。

現在も、米国では、東洋的な考えを取り入れ、異文化交流をしようとしています。2008年、米国のスタンフォード大学医学部にジェームズ・ドゥーティ (James Doty) 博士によって設立された「慈悲と利他の研究教育センター (Center for Compassion and Altruism Research and Education)」の活動などは、その最たる例でしょう。「慈悲 (Compassion)」や「利他 (Altruism)」という東洋的な考え方を米国に取り入れ、問題解決をはかろうとする姿勢は世界的な共感をよび、日本でも関心を集めることになりました。

ありがとうございました。では、渡邊先生お願いいたします。

渡邊：松村先生ありがとうございました。それでは、引き続き、私、渡邊と申します。比較文化学部で教えておりますけれども、今日、このシンポジウムで、機会をいただいて、私の研究、それから東アジア関係で、研究の関係ですけれども、興味を持っていることについて、短く述べさせていただきます。ちなみに、私自身、アメリカに20年ぐらいいたんですけれども、ただ最近では、東アジアとヨーロッパとの関係、アメリカではなくヨーロッパとの関係を調べております。特に、重点的に調べているのが、近世ヨーロッパに受容された古代ギリシャローマ伝統、特に擬古典ラテン語なんですけど、私、よく思うんですけれども、漢文とおそらく相当重なるところがあって、東アジアで長いことを古典に則った漢文が使われていたように、ヨーロッパでも長いこと、そして実は中世より後、14世紀以降、古典復興というものがあり、古代のラテン語の文体というものもしっかり研究され、それに則った展望というもの書かれていたわけです。ただ、最近では、擬古典ラテン語は、要するに古典のまねであるってということで、あまり重視されない傾向にあったんですけれども、こ

こ2, 30年くらい, かなり研究が進んでいます。しかしながら, まだ読まれていない, 十分吟味されていない, テキストというのは本当にヨーロッパ中に大量にあります。そして, この擬古典ラテン語伝統等, 日本との接点というものを, 特にまた調べているんですけども, 近世いわゆるキリシタンの時代, だいたい16, 17世紀ですが, 日本人もこれを一時的にいわゆるイエズス会の教育を通じて, 受容しており, きちんと調べると, 実は日本人用の擬古典ラテン語の教科書, 文法書, 辞書, それからリーダーのようなもの, これらが16, 17世紀に印刷されていますし, 相当本格的に教育されていたと。

その結果, 少なくとも, 数人くらいの日本人は, 古典的なラテン語も書けるようになっていたということもわかります。それから, 日本でいわゆるキリシタン宣教が行われ, 弾圧されて隠れキリシタンになっていくわけですけども, 日本でカトリックが宣教されていた時代の出来事が, 多くヨーロッパに伝えられ, あちらで劇ですとか, 古典ラテン語で書かれた叙事詩の題材にもなっています。最近まで, ほとんど注目されてこなかったんですけども, そういうことはギリシャ・ローマの伝統の文脈の中に, 日本のことは突然入ってくる, というような時代でもあるので, そのあたりのことを私は調べています。ただ, 中国との関係も, 私, 考えてみると, いろんなことに手をつけて, 高校時代, 中国にちょっと行って勉強したこともあったので, 昔から, 中国の古典の伝統にも興味を持っていて, 今年の9月, イタリアで学会に出たんですが, そのイタリアの学会っていうのが「ラテン語と東アジアとの出会い」というテーマで, その学会に出て, 16から19世紀の擬古典ラテン語を深く学んでいたヨーロッパ人たちと中国の人文伝統の出会いには確かにあって, ただこれは, 最近, まだ調査が進んでいる段階なんですけれども, 手書きの数多くの中国に渡ったイエズス会の人たちの中国古典とラテン語のノートですとか, 中国古典を古典ラテン語に訳して出版したものとか, おそらく出版の準備のために手書きで訳しているものとか, そういったものはかなり大量に今見つかっています。だから研究は始まったばかりです。

それから最後に, 日本の潜伏キリシタンとカトリック人コミュニティとの出会いってことですけ

れども, これも17世紀以降, 日本人キリシタンの東南アジアでのディアスポラがあって, 当時の東南アジアには, 既に華人コミュニティというものがあって, 特にスペインの植民地であったマニラなどでは, この華人コミュニティの人々が, キリスト教を受容し, 結構彼らなりの伝統で, 木版印刷でキリスト教のテキストを印刷しているというようなことがあり, 日本の潜伏キリシタンも彼らと出会って彼らの漢籍を読んだり, 時には日本に輸入したりなどしているはずなので, こういったあたりを, 私は自分の守備範囲から離れすぎてるんですけども, 他の人たちに声をかけて将来的にこういった研究が進めばなっていく, 夢です。そういったものも見ているという感じです。ありがとうございます。

松村: ありがとうございます。松田先生, お願いします。

松田: 松田春香と申します。朝鮮半島を中心とする東アジアの国際関係を専門としていますが, 問題意識としては, 国際関係が人々の生活や人生にどのような影響を与えているのか, ということにあります。また, 東アジアをはじめとする朝鮮半島の歴史は, 1945年(アジア・太平洋戦争終結)の前と後で, 別々に研究されているという現状があります。それらを繋ぐことが必要であると考えております。これまでは, 朝鮮半島で行われていた独立運動が, 海外に展開していき, それらが戦後とどのように関係しているのかを研究してきました。関本先生が委員を務めていらっしゃる大妻ブックレットの『ミュージアムへ行こう, 知の冒険』[今年度(2022年度)内刊行予定]で, 新宿の「平和祈念展示資料館」を紹介させて頂いた際, 満洲への日本人移民について調べていたら, 実は朝鮮人の方が人数が多かったことに改めて気がつきまして, 研究を始めた段階です。まだ詳細を話せる状況にないのですが, 「近現代 中国への朝鮮人『移民』」について, お話したいと思います。先ほど, 渡邊先生が華人の話をされたのですが, 朝鮮半島にも, キリスト教自体は中国を通じて入っていったので, おそらくそういった漢籍などは, 東南アジアの華人コミュニティだけでなく朝鮮半島にもあるかも知れない, とも思いました。

すみません, 話を戻します。まず朝鮮半島も,

ずっと鎖国をしており、中国との往来しかありませんでした。朝鮮時代の末期になって、間島（カンド）地方という、川を挟んだ朝鮮半島との国境地域に、特に朝鮮半島北部から移動する人が増えてきました。そこは、現在の中国の少数民族の一つが住む、延辺朝鮮族自治州にあたります。移民が活発化したのは、1930年代からの日本による満洲国の統治や日中戦争がきっかけです。日本の「国策」のもと、日本内地はもちろん、朝鮮半島南部から、たくさんの人々が開拓民（水田開拓）として送り込まれました。特に、1937年日中戦争の勃発以降、増加しました。またそれと同時に、植民地下の朝鮮半島の内側では、独立運動ができなかったため、中国における朝鮮独立運動というものが展開されていきました。その中国の中でも、皆さんご存じのとおり、「国共内戦」と言って、国民党と共産党との対立というのが激化していった時期でもあり、そういったことが、やはり中国における朝鮮人の独立運動にも深い影を落とし、中国の国民党は上海に作られた大韓民国臨時政府を支援し、「光復軍」という軍隊創設にも協力しました。これは現在、韓国国内で非常に高く評価されているものです。その一方で、中国共産党の方の傘下にも、実は朝鮮人部隊「朝鮮義勇軍」というものがありました。独立運動のときに作られた軍です。どちらも、特に朝鮮義勇軍の方は、後に1951～53年の朝鮮戦争で、メンバーのうち中国の人民志願軍として送られた人というのがいます。最近、中国では、「米中対立」を受けて、米国中心の国連軍と中国との対立を描く中国の愛国映画が数多く作られています。また、北朝鮮の方では1956年から粛清が行われました。そのため、現在は「朝鮮義勇軍」が中国の人民志願軍として参加したという事実は、中国・北朝鮮ともに認めていません。中国における朝鮮人の独立運動の展開というのが、戦後の朝鮮半島の分断に繋がっていたのではないかとここからもわかります。特に、キーとなるのが「満洲」という場所です。日本の敗戦時に約216万人の在満朝鮮人がいました。皆さんも、おそらく、「中国残留孤児」や13歳以上の「中国残留婦人」について、聞いたことあると思います。また、シベリア抑留に関しては、二宮和也さんの主演で、今年の12月から映画「ラゲリより愛を込めて」が公開される予定です。この映画は、実話に基づいたもので、二宮さん演

じる山本幡男さんという人が主人公なのですが、山本さんと妻・モジミさんの間で交わされた書簡の実物が、新宿の「平和祈念展示資料館」で展示されています。後ほど、案内のチラシを回覧するので、もし宜しければ見ていただけたらと思います。「満洲」での経験は、日本の「棄兵・棄民」政策により、日本人にとっても、大きな悲劇の歴史でもあります。在満日本人の場合は、約155万人いましたが、それ以上に多かった約216万人の在満朝鮮人にとっても、苦難の連続でした。在満日本人約155万人のうち120万人は、日本に帰ってくる事ができたのですが、それ以外の人たちは残留孤児や残留婦人、シベリア抑留などを経ました。朝鮮人がどうなったかを言えば、結局、中国大陸に残った人々も多く、現在、遼寧省・吉林省・黒竜江省の東北三省に約200万人弱の朝鮮族がいる、とされています。

現在、漢民族への同化政策が進んでいるという指摘もあります。1992年中国と韓国との間で国交正常化した後、経済発展した韓国への出稼ぎのため韓国へ移動するという人も、増えています。現在、帰化者を含む約85万人の中国朝鮮族の出稼ぎ労働者が韓国にいても言われています。ただ、現在、韓国国内ではすごく反中感情が高まっていて、皆さんも写真をご覧になられたかわかりませんが、今年（2022年）の北京オリンピックの際、「韓服」論争というのがありました。朝鮮族が、中国少数民族の1つという意味で、韓服（チマチョゴリ）を着た女性が五輪開会式に登場しました。それに対して、韓国国内ではこれは中国による文化のはく奪であるという意見が出ました。約85万人の中国朝鮮族が現在韓国にいるにもかかわらず、彼ら／彼女らの存在というのはあまり知られてないというのが、中国朝鮮族という「ディアスポラ」（diaspora）の置かれた現状です。朝鮮戦争に参戦した中国朝鮮族の一部の末路を、後ほど大学院生の坂本陽（ひかる）さんからお話しして頂きます。坂本さん、よろしくお願ひします。皆様、ありがとうございました。

松村：ありがとうございます。関本先生、お願ひします。

関本：文学部コミュニケーション文化学科の関本紀子と申します、私の専門はベトナム植民地時

代の社会経済史です。今日は、本共同研究が日中米文化の相関関係ということも1つのテーマでしたので、私は専門ではないのですが、ベトナムの日本経由の西洋文明の需要をテーマ、に皆さんにお話したい、ご紹介したいと思っております。

皆さんは現代ベトナム語の中に、日本で作られた和製漢語が非常に多く使われているということをご存知でしょうか。和製漢字熟語というのは、明治時代に日本が西洋化の過程で、西洋文明の概念を意味のある漢字を組み合わせでつくった、新しい翻訳語のことです。こうした新しい単語を和製漢字熟語とか和製漢語と言います。それは、音の訳、マウスやパソコンなどではなく、漢字の組み合わせ、というところが重要です。例えば、こちらに示しているような海軍とか、陸軍、病院、精神、教育など、その数は数千にも上ると言われています、この和製漢語というのは、中国にもたくさん伝播してしまっていて、中国における和製漢字熟語の研究というのはかなり盛んに行われているのですが、ベトナムに関してはまだ始まったばかりというような状態です。ベトナムにも、20世紀の初頭からかなり多くの和製漢語がベトナム語の中に導入されました。それは一体なぜなのでしょう。それは東に遊ぶ運動と書いて、東遊運動というものがきっかけになっています。もしかしたら世界史を高校時代選択した方は、この東遊運動というワードを覚えていらっしゃるかもしれませんね。

東遊運動は、ベトナム人青少年の日本への留学運動のことです。1905年に日露戦争で、日本が軍事大国のロシアに勝ちました。このニュースは当時ほとんどの国が植民地化されていた東南アジアでも、非常に大きな衝撃をもって迎えられました。日本に学ぶことで植民地支配から脱しようという運動がベトナムでもはじまり、それが東遊運動ということになります。留学生の数は、1908年には200人とも300人とも言われるような大規模な数になります。これだけの数の青少年が、外国に留学したというのはベトナム史上初めてのことでした。こうして、ベトナム人留学生は日本語、和製漢語を通じて、西洋のいろいろな文明の概念を学んでいきます。そして、留学を終え、帰国後にそれぞれ学校を建てたり、学校で教えたりする過程で、日本の和製漢語を使って西洋文明を教育しました。それで、ベトナム全土に和製漢語が浸透していったということになります。

音だけはベトナム語に直していますので、海軍のことをカイグンというのではなくて、海という音はベトナム語ではハイ(hải)、軍のことはクアン(quân)というので、ハイクアン(hải quân)と発音します。ベトナムの漢字の読みは1対1なので、日本のように大宮の宮がミヤだったり、グウだったり、ジンだったりということはありません。そのため、日本人にとってベトナム語は非常に勉強しやすい言語なのです。逆に、ベトナム人も今、漢字さえわかれば、日本語習得しやすいということが言えるのですが、現在ベトナム語表記はアルファベットですので、その恩恵になかなかあずかれないということがあります。

ちょっと話がずれましたけれども、東遊運動のきっかけを作ったのが、ファン・ボイ・チャウという人物になります。ファン・ボイ・チャウは、独立運動の英雄としてベトナムでは誰もが知っている人物です。一方日本では、彼の名前を知る人はほとんどいないので、現在でもベトナム人留学生が日本に来て、日本人が彼のことをほとんど知らないという事実非常に落胆するという話もあります。そんな中、2007年に東遊運動100周年がありまして、それを契機として、日本とベトナム双方で、日越交流を見直す動きが出てきています。現在の上皇、上皇后がベトナムに訪問された際も、ファン・ボイ・チャウ記念館に足を運ばれて、それが現地でも非常に大きく取り上げられました。また、東遊運動に協力を惜しまなかった浅羽佐喜太郎という人物がいますが、彼の地元の静岡県袋井市では、小学校でこの東遊運動の主な内容を授業で取り上げたり、寄付を募ってベトナムに小学校を建設するというプロジェクトも行っていました。様々な交流が最近見られるようになりました。数年前に、日本の在留外国人で第2位はベトナムになり、皆さんの身近にいる外国人が一番多いのが中国、その次がベトナム、その次が朝鮮韓国です。ここで言いたいのは、ベトナム人も、みなさんの周りにたくさんいるということなのです。今後もその数は増えていくと予想されていますので、日本とベトナムとの関係を考えてときに、昔のこうした交流を知っている人がたくさんいれば、何か良い異文化コミュニケーション、理解のきっかけになるのではないかなと思います。同じ言葉を共有している隣人として、今後も相互理解が深まっていくといいなと考えております。以上です。

松村：ありがとうございます。木村先生お願いします。

木村：木村と申します。よろしく申し上げます。私は、まだ十分に整理されていない日本の戦前の漢文教科書を調査しています。明治・大正期において学ばれていた教科書や教材の変遷をより明らかにするために、現在は他教科と漢文科との関係に関心を持っています。漢文教材の選択には他教科の教材の採録傾向も影響を及ぼしている可能性が高いからです。そして先ほどの松村先生のお話の中で出てきた長尾雨山も教科書検定を担当していたように、日本の漢学者の教育界における活動についても明らかにしたいと思っています。

今回取り上げるのは明治10年代(1877~1886)に中学校(当時は男子のみ、進学率はおよそ一割未満)の歴史科で使われた、世界史を教えるための漢文体教科書の『万国史記』20巻(岡本監輔, 1879年)です。これは歴史科では明治初期においては教科書として使われ、漢文科では明治期全般において西洋事情を紹介する教材の出典として扱われた本です。

明治5年(1872)から日本では新しい学校制度が始まりましたが、小学校の整備が優先されていたので、明治10年代では中学校の教育課程や教科書は十分な整備がなされていませんでした。そのため中学校専用の教科書は少なく、小学校用や翻訳書、漢文体のものが使われていました。使用する教科書は各地域によって決められ、文部省(現文部科学省)がその適否を判断していました。ここでは中学校で使用されたことが確認できた教科書を扱います。

漢文体教科書の特色を理解するために、まず当時中学校で使われていた、日本人による日本語で書かれた小学校用の教科書(西村茂樹編『校正万国史略』10巻11冊, 1876年)と、翻訳教科書(牧山耕平訳『巴来(パーレー)万国史』上下巻, 1877年)との違いを述べたいと思います。

このプロジェクトは日中米の文化をテーマとしたものなので、それぞれの教科書のアメリカ史について取り上げます。小学校用のものは生徒が全文を読むことを前提に作られていて簡潔に各国の興亡を述べたものです。

翻訳教科書と漢文体教科書は、小学校用教科書にはあまり見られなかった、各国の歴史や国民性

に対する見解が述べられています。翻訳教科書はアメリカ人の著作ですから、アメリカが独立するために奮闘した祖先のことを忘れてはならないと述べています。漢文の方もアメリカが独立し発展したことを高く評価しています。

翻訳教科書と漢文体教科書のアメリカに対する評価は大きくは変わりませんが、国によっては評価に違いも見られます。例えばギリシャについては、どちらも古代のギリシャ人が優れた文明を築いたことを認めています。翻訳教科書ではオスマン帝国統治下のギリシャ人には活力がないと述べています。一方、漢文体教科書では、ギリシャ人が先祖の遺風により奮い立って、トルコから独立したことを賞賛しています。それはこの本の著者が日本もそのように伝統を大切にしながら強い国にならなければならないと考えていたからだと思います。このように同時期に使われていた教科書と比較することで、漢文体教科書の特色や位置付けを明らかにしていきたいと思います。

次に、本国で使われている歴史教科書を参照することで、今取り上げた漢文体教科書の特色がより明らかになるのではないかと考えています。現時点で入手できたギリシャの小学校の教科書をもとに紹介しますと、現在のギリシャでは小学校3年生から歴史(Ιστορία イストリア)の勉強が始まります。神話時代から学び始め、4年生、5年生と時代を下って学び、6年生では同時代の歴史を学ぶというカリキュラムです。

先ほど取り上げた三種の教科書では、ギリシャは一度滅んでから復興したという書き方をしています。しかしギリシャの歴史教科書は神話時代から現代までギリシャ人の歴史を連続してとらえている所に違いがあります。私が原文を読める国の教科書に限られますが、日本、中国、ギリシャなどの歴史教科書も参照しながら、今回取り上げた漢文体教科書の特色について考えていきたいと思っています。

最後に、漢文教科書というのは狭くて閉ざされたイメージがあるかもしれませんが、時に中国以外の地域や国のことも考えるきっかけを与えてくれる、広がりを持ったものであるということを知ってほしいとも思っています。以上です。ありがとうございます。

松村：木村先生ありがとうございます。黎さんお

願いたします。

黎：こんにちは。人間文化研究科博士課程3年生の黎静如と申します。

私の本日の発表テーマは、「宮崎駿の中国でのSNSの評価から考える—宮崎駿という人物と彼の作品に纏わる異文化受容—」です。

宮崎駿は、日本が生んだアニメーターであり、その名は世界でも広く知られています。そんな彼の人物像や作品に対して、最近の中国のSNS上ではどのように取り上げられているのかを見ていきたいと思います。

まずは、彼の生い立ちから見ると、特に中国との特別な関わりはありませんが、彼のアニメーターに至る道で、最初の啓蒙作品として、中国の民間伝説を原作としたアニメーション『白蛇伝』から深く影響を受けたことが自伝の中に記載されています。

彼の作品、たとえば『となりのトトロ』と『千と千尋の神隠し』は、中国での興行は日本より大幅に遅れたにもかかわらず、良い成績と評判を収めました。

2019年UPの、中国のSNS『WeChat』の記事に、中国で上映された『千と千尋の神隠し』について、「観衆の一人としてこの映画に出会えたことが「幸運」だ」とありました。そのほか、宮崎アニメの作品は、人々の心を温め、癒しを感じられる、といったような好意的な記事が多くあります。

しかし、同じく『WeChat』には、宮崎駿は、「中国本土からの講演の要請、さらには、自伝の中国語への翻訳要請などを断り続けてきた」という記事も見えます。ですが、この記事は、これを否定的にとらえず、彼を理解し、高く評価しています。

このように、最近の中国のSNSにおける宮崎駿に纏わる記事とコメントを分析することで、彼と彼の作品が、異文化コミュニケーションの架け橋となり、「芸術は言葉の壁や国境を越えられる」可能性を示してくれていると思われまます。さらには、今後彼の作品が「新しい古典」になる可能性が高いのではないかと考察します。

私の発表は、以上です。失礼します。

松村：黎さんありがとうございます。では、利根川さん願いたします。

利根川：利根川と申します。よろしく願いたします。

私の研究は、呉昌碩(1844-1927)が早期に刻した印について、印文と側款を解釈して呉昌碩早期の交友関係と文人的思考を解明することです。呉昌碩は、清朝末期から中華民国初期にかけての文人で、詩書画篆刻に優れ四絶と称せられました。篆刻は、柔らかい石に主に篆書体という書体の文字を書き、刀で刻して印を作ることです。この印を刻印といいます。刻す文を印文といいます。名前・雅号・室号(書斎の名前)、および成語などを題材にしています。印文を刻した後に、その刻印に関することを石の側面に刀を用いて刻すことがあります。これを側款といいます。呉昌碩は、自ら篆刻第一といい、その刻印は中国、そして日本人士にも愛好されました。呉昌碩は、幼少時に父から読書の手解きを受け、14歳の頃から父の指導のもとに篆刻を学び、刻印を始めました。これは、呉昌碩が篆刻に打ち込んだ原点と言えます。呉昌碩の刻印は数多く、側款も多く刻しています。

呉昌碩は、41歳(1884)時に「禅甕軒」という自らの室号を刻しています(『缶廬印存』1980.5.5書学院出版部 所収)。この印に側款が刻されています。その釈文、訓読、日本語訳を以下に記しておきます。

「得晉博。雙行。文曰、元康三年六月、陳鍾紀作。宜子孫、位至高遷、累世萬年相禪。因以名吾軒。甲申春、倉石記。月字下奪廿七日孝子中郎。」

「晋の博を得る。双行。文に曰く、元康三年六月、陳鍾紀して作る。子孫に宜し、位高遷に至り、累世万年相ひ禪ると。因りて以て吾が軒に名づく。甲申春、倉石記す。月字下に二十七日孝子中郎を奪ふ。」

「晋代の博を得た。二行からなり、その文に「元康三年(293)六月二十七日、中郎の孝子陳鍾が紀して作る。子孫が長く繁栄し、高位高官に至り、代々万年にわたって禪られるであろう」とある。よってこれを私の室に名づけた。甲申(1884)春、倉石(呉昌碩の字)が記した。」

この側款から、中国晋代の博(甕)を得て、それに記された文中に「禅」という語があり、自らの室を「禅甕軒」と名付けていることが解ります。博は焼成した煉瓦で、方形の厚い平らな板です。漢代に墓室などに用いられました。その表面に紋様・文字が浮き彫りにされています。博は、当時の生活・文化を知る上で貴重な資料です。呉昌碩

は、博を大いに愛好し、その文字態で刻すこともありました。ですから、その博を手にした喜びもひとしおであったでしょう。「禅」という語は、天子から位を授けられるという意味があります。この博の作者は、293年に、高位高官に至り、子孫が長く繁栄することを願い、それを博に記しています。この博を得た呉昌碩の思いは、悠久の年を隔てた約1600年前に博の作者が願った内容と同じであり、大いなる感受を得たのでしょう。この思いと博を得た喜びとを託して室号を「禅髻軒」としたのでしょう。そして、この大きな情念のこもった「禅髻軒」を小さな方寸の石印材に刻して留めたのであろうと思います。

このように、側款の内容から、その刻印時の状況や心情を知ることができます。他にも呉昌碩の数々の側款を見ますと、呉昌碩が、30から40歳頃に、知遇を得た多くの金石家・收藏家を訪ねた旨を刻しているものがあります。そこでは、主に周代の青銅器、秦漢時代の博・印・書物・拓本などを鑑賞し、見識を深めていきます。この地道な探究が、古き良き物を修得し篆刻に応用して、呉昌碩が文人として開花する基盤となっていることが窺えます。私は、さらに呉昌碩の印文と側款を読み込み、古典に対する呉昌碩の思いを理解し、交友関係を考察して、呉昌碩の学問の本質を探究して文人的思考を解明したいと思います。以上です。ありがとうございます。

松村：利根川さんありがとうございます。

皆さん本当にありがとうございます。それぞれの先生方また大学院生の方々に、ご自身の興味ある分野をご発表いただいたのですけれども、奇しくもアジア太平洋という重要な文化圏の中に入っており、それらの相関関係を考えれば何か見えてくるんじゃないかというのが、このシンポジウムの趣旨です。今日、フロアーにもお越しいただいておりますので、お1人ずつ、ご発言をいただきたいと思います。坂本さんから、お願いします。

坂本：国際文化専修の今修士課程1年目の坂本です。先ほど松田先生から言われていたディアスポラについて、私からディアスポラの末路というか今、中南米にも 코리아ディアスポラの方が大勢ではないんですけれども、アルゼンチンにいるディアスポラの方が、かなり松田先生が紹介されて

た内容に近いという形なんですけれども、捕虜としてアルゼンチンを選ばざるを得なかったという方がいて、第二次世界大戦が終わった後に引き上げ、自分たちが戦争に関わってしまったからどうなるかってなったときに、自分で国を南とか北に選べればよかったんですけれども、自分が中国にいたから、共産主義っていうふうに見られて、中立国に行かなきゃいけないけど、行かなきゃいけないから、インドかブラジルかアルゼンチンなければいけなかったっていう記述があつて。そこで、ある人は、アルゼンチンを選んだっていう人が12人や13人っていう記述があつたがあつたので、詳しくは12か13人からちょっとわかんないんですけれども。そういう人たちも捕虜としてアルゼンチンに送られて、それから自分たちでコミュニティを築いていくっていう、結構つらい歴史があつてっていうところがあつて、アルゼンチンに渡っても、自分たちもつらいし、またそれから後にやってきた、第2弾としてやってきた移民の人たちとの、自分たちのコミュニティの中でも摩擦が起きてしまうっていう2つの問題が浮き彫りになってしまうっていうのと。

あともう1個、同化政策が中国で行われたって言われたんですけど、少し似てるなと思ったのが、10月の中旬ぐらいに、異文化体験をさせてもらって、チマチョゴリっていう民族衣装を着て、韓国系の団体がやってたので、韓国の韓に服で韓服って言われてて韓服体験をするっていうのだったんですけど、そういうのを韓国系の団体がしてて、「皆さん、日本人だけ韓服着てたらすごく韓国人に見えて、もうこれで韓国人ですね」みたいに言われてて。でも、私、日本人で、これは異文化体験だから、別に韓国人になりたいわけじゃないんだけどな。みたいな感じだったんです。私より、年代が若い人たちを見てると、韓国人なれて嬉しいうって感じの子がいて、それはちょっと文化を勉強する中では違うんじゃないかなと思ったりっていうので、どこの国でも同化政策とまで言ったら乱暴かもしれないんですけど、文化の線引きみたいなのが難しいところも出てきてるかなと思いました。以上です。

松村：ありがとうございます。土田さんお願いします。



土田：コミ文3年の土田です。私は、初めてこういうシンポジウムに参加したんですけど、ちょっと勉強不足で。みなさんの発表、内容があんまり理解できなくて勉強不足かなっていうふうに思いました。私、卒論のテーマとかで悩んでいたんで、今回、シンポジウムに参加して、自分の視野が狭いことに気づかされたので、自分の関心を広げて、いろんなことに関心を持たないとだなんていうふうに思いました。

松村：ありがとうございます。望月さんお願いします。

望月： コミュニケーション文化学科 3年の望月あい子と申します。パネリストの皆さま、本日は貴重なお話をありがとうございました。近現代アジア太平洋文化について初めて知ることばかりで、とても勉強になりました。松村先生に一点質問がございます。黎さんの発表の中で、芸術は言葉の壁、国境を越えられるかもしれないとありました。その後、松村先生の、ボストン美術館にある呉昌碩の扁額は装飾品として飾られているというお話を受け、それも、芸術は言葉の壁、国境を越えられるかもしれないということに通じるのかなと思ひまして。ご回答いただければと思います。

松村：ありがとうございます。おっしゃる通りだと思います。そういった芸術というものが、言葉の壁を越えるからこそ、芸術が文化理解の最も良い方法ということになるんじゃないかと思ひます。その通りだと思います。

望月：理解が深まりました。ありがとうございます。

松村：鈴木さんお願いします。鈴木さんは、卒論で犬養毅を研究されています。ぜひ、そのあたりお願いします。

鈴木：まず、自分が研究してる範囲とは全然違う研究をされてる方もいて、本当に参考になりました。犬養の話とは違くなっちゃうんですけど、2個質問したいです。まず、関本先生に質問なんですけど、ファン・ボイ・チャウさんは、なんの立場の人なんですか？

関本：民族運動の代表的な人物というふうに捉えていただければ良いかなと思います。1つ、民族運動を行うために、組織した会の中心人物っていいですか、会主は皇族の血を引く、クオンデという人物なんですけれども、そのクオンデをトップに据えて、その下で実質的なことを全部取り仕切っていたような民族運動のリーダーというふうに捉えていただければと思います。

犬養毅を研究していらっしゃるということですが、ファン・ボイ・チャウもクオンデもずいぶんと、関係があるんですけど。

鈴木：そうなんですか？

関本：知らなかったですか？

鈴木：ちょっと教えていただいてもいいですか？

関本：犬養毅や大隈重信に、1番最初にファン・ボイ・チャウは、面談してるんです。そこで、本当は東遊運動っていうのは、軍備拡張のための軍事支援を日本にしてほしいということを開口一番申し入れたんです。でも実際は、日露戦争で日本は勝ったと言っても、本当にいろんな犠牲が大きくて、借金もかなりしているというか、戦費の82%を公債と借入金に頼ってたっていう状況なので、とても他の国も援助するほど余裕はなかったんです。犬養毅とか大隈重信が、そういう軍事的援助はできないけれども、西洋に勝ちたいのであれば、西洋の概念とか文化の概念とか文明の概念とか、そういうハードではなくてソフトがわからなければ、対抗できない。そういうハードじゃないソフトの面を教育するというのであれば協力ができるという形で始まったのが東遊運動なんです。クオンデという人がいましたけれども、クオンデは、本当に最後まで、犬養毅が暗殺されるまでずっと、犬養毅の家に行ったり来たりして、援助を受けていたということもありますので、よかったらそちらの方も研究深めていただいても嬉しいかなと思います。

鈴木：はい。ぜひこの方を卒論に入れたいと思います。ありがとうございます。もう1個質問があって、黎さん、宮崎駿が中国語の翻訳とかを断ってたんですけど。

黎：はい。私が見た記事ではそのように記載されていまして。

鈴木：そこで、中国の方の反響として、あんまり批判的な意見は出なくて、称賛されたっていうふうに言ってたと思うんですけど。私が中国人だったら称賛の感想が出てこないかなっていうふうに思ったので、どのような称賛の意見があったのか教えていただきたいです。

黎：鈴木さん、ご質問ありがとうございます。このこと、実は、松村先生ともディスカッションをしたことがあって、先生からの回答としては、中国は、すでに物質世界から、精神世界に入っており、宮崎作品を受容する土壌ができていないかとのことでした。

私の知る限りでは、彼の作品は日本だけでなく、中国でも人気が高いことを示す記事が多くありました。つまり、あまり中国に来なかったり、積極的に講演をしてくれなかったりしたからといって、彼の芸術まで否定されているのではないと思います。中国の宮崎ファンは、作品を観て、もっと日本のことを知りたがっているのではないかと、私は思います。

私自身も日本のアニメに小さい頃から触れたことが、日本文化に興味を持つ一つのきっかけになりました。アニメは、ファンタジーではありますが、観衆に日本文化を身近に感じさせる力を確実に持っていると思います。これが、今回の SNS の記事のように、彼の作品に理解を示す理由であると考えています。

鈴木：はい、ありがとうございます。私もジブリすごく好きなので、芸術を通して文化が繋がってほしいなと思います。研究がんばってください。ありがとうございます。

松村：ありがとうございます。桑原さんお願いします。

桑原：コミュニケーション文化学科 4 年の桑原峰華と申します。本日は貴重なお話ありがとうございました。私は特に、卒論で扱ってるとかはなくて、1, 2 年生のときに、中国文化について学ばせていただいて、かなりの知識だったので、本当

に皆さんが言ってることがすごいなぐらいの感想しか出ない聞き方で、すごい一生懸命メモしたぐらいだったんですけども、本当に繋がってるっていうのをすごく強く感じていて、日中米って、一応括りは今回あったにも関わらず、やっぱりいろんな国とかもちろんだし、人との繋がりがっているのがすごく広がっているか深まっているかというのを、言葉にできなくて漠然としたことになってしまいうんですけど、強く感じれて、いろいろ研究するってすごくそういうところに繋がるんだなと思って、非常に勉強になることばかりで身が引き締まる思いでした。本日はありがとうございました。

松村：桑原さんありがとうございます。土澤さんお願いします。土澤さんは、ディズニー映画を深く研究していて、その本質まで明らかにしようとしています。ディズニー映画はアメリカの映画なので、アメリカの価値観が如実に出ています。そのあたりのことを話していただくとありがたいです。

土澤：コミュニケーション文化学科 4 年の土澤麗奈と申します。私の研究について少しお話をさせていただきますと、ディズニー映画って結構、初期の白雪姫やシンデレラだと男性についていくお姫様っていう形が主流となっているんですよね。そこから時代が流れていくにつれて女性が自立していく姿であったりですか、女性が自ら異文化交流の橋渡しとなったりですか、そういう風にどんどん発展していくっていうところに着目して研究しております。私が、最終的に行き着いたところが、『アナと雪の女王』は「利他的」の価値観を非常に大切にしているということでした。この利他的っていうのが、自分が幸せになるために幸せな事をするっていうよりも、誰かの幸せを願って行動する、努力をするということかなと思っております。それが、アメリカの今後のディズニー映画の描き方なのかなという風に考えていたので、今回の話と繋がるのかわかりませんが私の研究の話をさせていただきました。

パネリストの皆さん、本日は貴重なお時間ありがとうございました。私はディズニー映画は、アメリカの歴史を中心に研究をしていたので、アジアの方のことは全く無知な状態でして、大学生活

においてもあまり扱ってこなかった分野だったので、ここまで奥深かったんだと今更ながら知って、それが大変勉強になりました。貴重なお時間ありがとうございます。

松村：土澤さん、ありがとうございます。この「利他」というのは、東洋的な考え方ですよ。それが、アメリカにも入ってきているということがよくわかりました。ありがとうございます。

戸田山先生には、トリを取っていただくことにして、廣野さんいかがですか。廣野さんは中国の少子化問題を卒論のテーマにされています。『中国統計年鑑』などのデータを分析して、非常に説得力のある論文を書かれています。

廣野：文学部コミュニケーション文化学科4年の廣野と申します。本日は貴重なお話をさせていただきありがとうございます。私は、中国の少子化問題について卒論を書いているのですが、今まで中国のことばかりで韓国やアメリカのことを深く考えないで卒論を書いていたので、今後研究していく上では、中国ばかりを見るのではなく、他の国の観点からも考えていくべきだと思うようになりました。

松村：ありがとうございます。西山さんお願いします。西山さんは台湾のコロナ対策をテーマに卒論を書かれており、台湾の「ヨコ社会」形成にも論究されています。

西山：コミュニケーション文化学科4年の西山玲と申します。本日は貴重なお時間ありがとうございます。私も、大学4年間生活してきて、すごい台湾に執着してきた4年間だったので、アジアの中でも台湾メインで、留学行ったり、卒論も台湾の事書いてるんですけど、やっぱり中国だったり韓国だったり、アメリカも、ほかの国についてあまり知る機会がなかったので、このシンポジウムで皆さんの深く研究されている内容を聞いてすごい勉強になりました。本当に台湾のことしか見てなかったんで、留学にも行って、世界のことについて興味を持つこともできたので、皆さんのお話を聞いてみて、これからは台湾以外の国のことも知っていきたくて興味はとて湧きました、本日はありがとうございます。

松村：ありがとうございます。では、戸田山先生お願いいたします。

戸田山：コミュニケーション文化学科の教員の戸田山祐と申します。本日はパネリストの先生方、そして院生の皆様、大変それぞれ興味深いご報告ありがとうございました。また、松村先生のゼミの学生さんが多いと思うんですけど、皆さん卒論の執筆が順調に進んでいるようで、大変感心いたしました。何よりだと思います。なかなかトリを取れとおっしゃられても難しいのですが、シンポジウムのタイトルは近現代アジア太平洋文化の諸相となっておりますが、そこに共通して影響を与えてきた近代西洋の知であるとか、文化であるとか、あるいはパワーの存在がそれぞれのご報告から垣間見え、伝わってきた点でも、非常に興味深いと思いました。私は、アメリカ合衆国であるとか、あるいはメキシコなど、ラテンアメリカの歴史が専門で、それらの地域とアジアとの関係を自分では専門として研究しているわけではないのですが、こういった形で、それぞれのご報告から、いろいろなことを学ばせていただいたと思います。それで、どのご報告も非常に興味深い内容で、ぜひいくつか質問させていただきたいんですけど、よろしいですか。まず、木村先生に少し質問させていただければと思います。今回のご報告では、近代日本の漢文教育が題材とされていたと思いますが、そこで、教科書の中でのギリシャについての記述が例として挙げられていて、これは大変興味深いと思いました。そのギリシャについての表象というのが、明治期の日本で出た教科書といっても、それが欧米で出た本の翻訳かあるいは日本人が書いたものかで、かなり違う。前者がどちらかというと同時代のギリシャに対しては否定的なわけですよ。オスマン帝国の支配をずっと受けていたギリシャは、駄目になっているというふうなことを書いている。一方、日本で書かれた教科書では、ギリシャの表象というのは、かなり好意的だったということでしょうか。そのあたりの具体的な記述の違いであるとか、背景についても、少し詳しくお話いただければ幸いです。

木村：ご質問ありがとうございます。申し訳ありませんが、その問題についてはまだ調査を始めたばかりであまり詳しいことはわかりません。中国

の歴史書は史実を述べた後に批評をつけるので、漢文体教科書では著者の主張が強く出たものと考えられます。しかし現在調査した範囲では、先ほど紹介した翻訳教科書や漢文体教科書の他には、著者の見解が強く出たものをまだ見つけることができていません。

今後の計画としては、『新約聖書』の漢文訳が日中の漢文とともに修身科の教科書に収められ、イソップ童話の漢文訳も漢文科の教科書に採られています。それらもギリシャに関連する文化として広くとらえて、漢文を中心として戦前の教科書に見るギリシャの思想や文化の役割について考えていきたいと思っています。

戸田山: どうもありがとうございます。それから、もう1つ渡邊先生に、少し質問させていただいてもよろしいでしょうか。近代のラテン語のテキストにおける、日本だとか中国の記述についてのお話を大変興味深く拝聴しました。これは、17世紀頃のテキストですよ？日本や中国についての情報が、しかもラテン語という当時のヨーロッパの知識人の共通語でいろいろ書かれて、いろんなところで読まれている。この現象自体、大変面白いと思います。当時、地理書だとかあるいは遠く離れた国の文化を紹介するといった趣旨の、書物が結構アジアについて触れていたと思います。ケンペルが日本に来て、それで記録を残しているだとか、それから行ったことがないはずのモンタヌスだとかアタナシウス・キルヒャーとか、日本について書いているとか、様々な例があると思います。特に先生がおっしゃっていたのが、詩や劇などにも、日本あるいは中国の話が出てくることですが、これは当時のフィクションでも、日本だとか中国のイメージが結構いろいろな形で登場していたということなのでしょうか。少し実例などを示してご説明いただければ幸いです。

渡邊: はい。ご質問ありがとうございます。まず、既に16世紀から、地理書で日本や中国などについて詳しい情報が始まる、特に17世紀半ば、オランダを中心に、地理学というものが広まっていて、その中で本当に日本だけを取り上げた本っていうのが出ています。ちなみに、これは、ちょっと私も調べ始めたんですけども、プロテスタントの目線から日本は描写されているって言う点で

非常に興味深いです。ご質問があったフィクションっていいですか物語ですね、物語系の中の文学で、日本が描かれるというのは、やはりカトリックの殉教の類です。これが、いわゆる1590年代の26聖人の時代から、日本から、どしどしもたらされるようになり、ただ、これはもちろん日本限定ではないんですけど。インドでもこういった殉教物語が出てきて、それが詩になったりしています。ただ、ヨーロッパの外で、宣教師たちが行って殉教したり、あるいは宣教師に感化された現地人たちが殉教したりというのは、あちこちで実際に起きているんですけども。インド、南米はもちろんそうです。それから、中国でも一部、日本ほどのスケールではないんですけども起きており、それから日本でかなり大々的な殉教が起きて、その後ベトナムですとか、朝鮮半島でも同じようなことが若干繰り返されてるんですけども。ただ、カトリック圏の、これはポルトガルですとか、今確認できてる例では、フランス、イタリア、オーストリア、ドイツ、その辺りで、かなり劇になっていて、実は当時、カトリックの団体、特にイエズス会ですけれども、あらゆる海外の修道会もヨーロッパ中で多くの学校を運営しており、そういった学校で、毎年演劇を作成上演しています。

ただこれは、今の学校演劇って想像されるようなものよりも、かなりプロフェッショナルな大規模なお金をかけたものであって、こういった学校はおおむね地元の王侯貴族ですとか、大司教ですとか、そういったレベルの人たちの後押しを受けて、王侯貴族の子供たちなんかも大勢入ってきて、彼らは実際演じて、そういった劇を1年に1度上演し、町の大きいところを含む偉い方々が見に来る、というようなことを行っており、様々な劇が実際書かれて上演されてるわけですけども、その旧約聖書を題材にしたものすとか、時には、聖書以外の古代ローマのこを取り上げたりすとか、してるんですが。それからいわゆる聖人伝です。古代中世の聖人伝、ただ同時代の聖人伝ってなると日本の事柄が多くなってくるわけです。正確な統計っていうものはないんですけども、ちょっと私が大雑把に見てみた感覚だと、こういった劇っていうのは、本当に、何万ももしかしたら何十万というレベルで作られてるはずなんですけれども、日本を扱ったものか、数%ぐらいはあるかなって感じです。1、2%とか。これもどれくら

い広く含むかっていうのによるんですけれども、例えば聖フランシスコザビエルの生涯を扱った劇というもので、1つの幕が日本におけるものですか、ただ、日本のこの殉教者を、日本人のこの殉教者の物語を取り上げますっていうので、劇全体が日本についてのものですか、そういったものもあります。それから、私、詳しくはないんですけども、モーツアルトの『魔笛』とかにもちょこっと日本が入ってきてる。おそらくそれは、こういった当時の宗教劇の影響を受けているのかなという感じがします。ただ、こういった宗教劇それから、同じような叙事詩、ラテン語の叙事詩といったようなものがあるんですけれども、これらは本当にギリシャローマの伝統を組んでおり、ギリシャ悲劇とか、その体裁、構成といますか、そういったものですか、あと専門的な話ですけど、韻律ですか、そういったものを全て、古代ギリシャローマの伝統に則っており、なので、手書きで脚本などが残っているわけですけども、ある程度古代ギリシャローマの劇のことはわかっていないと、読んでもわけわからないというか、そもそも読めないというようなこともあり、なので今までほとんど扱われてきませんでした。ただ、ここ2、30年ほど、ヨーロッパを中心にして、こういった古代ギリシャローマの流れをくむラテン語文学、近世以降のものを、もうちょっとしっかり調べようという動きが出てきて、なので、私もそういった先行研究を調べて、全体の文約を知った上で日本を扱った、これを徹底的に見ていこうということをやっております。

松村: よろしいでしょうか? ありがとうございます。

フロアーの皆さんにもご発言をいただいて、とても意義の深いシンポジウムになったかと思えます。皆さん方のご発言を聞いておりますと、アジア太平洋の文化はつながっており、日本はそのハブになっているという感じがいたします。

今、戸田山先生が木村先生と渡邊先生にお聞きになられたこととも少し関連しますが、『新約聖書』の原典はギリシャ語で書かれているので、キリスト教の影響を受けたアジアの文化の中でも、ギリシャ語は原典の言語として重要視されていたように思います。また、キリスト教は、中国に大きな動きをもたらしています。1997年制作の香港・日本合作映画『宋家の三姉妹』で描かれている三姉

妹も敬虔なクリスチャンでした。長女の宋靄齡は孔子の子孫で中国の財政を司った孔祥熙と、次女の宋慶齡は「中国革命の父」とされる孫文と、三女の宋美齡は中華民国総統となる蔣介石と結婚し、中国を動かしました。その三姉妹のお父さんが、チャーリー宋、本名を宋嘉澍というプロテスタント・メソジスト派の牧師さんです。米国ボストンで学んで牧師になり、実業家に転身し、中国語訳聖書の印刷で財を成すという、そういった方です。宋家の三姉妹も、当然のことながらキリスト教の教えの中に入っていて、米国ジョージア州のウェスレียน大学に留学しており、宋美齡はその後、マサチューセッツ州のウェルズリー大学を卒業しています。そういった人たちが実は中国を動かしていた。

そして、そういった中国の動きを支援したのが日本でした。鈴木さんが卒論でとりあげている犬養毅のような心の広い政治家がいて、革命派の孫文も、保皇派の康有為も、みんなかくまってあげるわけです。そういった役割を日本が担ったからこそ、中国が動いたといえるのではないのでしょうか。そして、そのような動きが朝鮮半島にも及んでいたことを、松田先生、坂本さんがご指摘くださいました。また、日本を媒介にして、漢字文化がベトナムにもたらされていたことを関本先生にお教えいただきました。また、黎さんが発表された宮崎駿のような、日本を代表する芸術家が、改革開放によって、中国に入っていく、中国の人たちを感化していく、そういった役割を果たす。それから、利根川さんのご発表くださった呉昌碩ですが、清末の中国で人気があったんです。だけど、辛亥革命が起こって、中国の人たちには、呉昌碩はもう古臭い文人にすぎないとされた。そんな中、日本の人たちが、詩書画印四絶の文人すごいじゃないかということで、高く評価して、呉昌碩は世界的な芸術家になっていったのです。日本が果たした役割というのは、やっぱりとっても大きい。

私たちは、日本にいる研究者ですから、日本がこういったアジア太平洋の文化交流の中で、どのような役割を果たしたのかを見てゆくことは、非常に意義が大きいんじゃないかと思えます。今日は本当にありがとうございます。パネリストの皆さん、またご来場くださった方々に深く感謝申し上げます。どうもありがとうございました。

**発言者紹介（発言順）**

松村茂樹：大妻女子大学文学部  
コミュニケーション文化学科  
渡邊顕彦：大妻女子大学比較文化学部  
比較文化学科  
松田春香：大妻女子大学文学部  
コミュニケーション文化学科  
関本紀子：大妻女子大学文学部  
コミュニケーション文化学科  
木村 淳：大妻女子大学非常勤講師  
黎静 如：大妻女子大学大学院国際文化専修  
博士後期課程3年次生  
利根川千枝子：大妻女子大学大学院国際文化専修  
修士課程1年次生  
坂本 陽：大妻女子大学大学院国際文化専修  
修士課程1年次生  
土田理咲子：大妻女子大学文学部  
コミュニケーション文化学科3年次生  
望月あい子：大妻女子大学文学部  
コミュニケーション文化学科3年次生

鈴木清花：大妻女子大学文学部  
コミュニケーション文化学科4年次生  
桑原峰華：大妻女子大学文学部  
コミュニケーション文化学科4年次生  
土澤麗奈：大妻女子大学文学部  
コミュニケーション文化学科4年次生  
廣野朱音：大妻女子大学文学部  
コミュニケーション文化学科4年次生  
西山 玲：大妻女子大学文学部  
コミュニケーション文化学科4年次生  
戸田山祐：大妻女子大学文学部  
コミュニケーション文化学科

**付記**

本研究は、2022年度大妻女子大学人間生活文化研究所共同研究プロジェクト（課題番号：K2214）「近現代日中米文化の諸相に見る相関関係」（研究代表者：松村茂樹）による成果の一部です。

**Abstract**

On November 28, 2022, the symposium "Aspects of Modern and Contemporary Asia-Pacific Culture" was held by the joint research project "Correlations in aspects of modern and contemporary Japanese, Chinese, and American culture" (Principal investigator: Shigeki Matsumura) by The Institute of Human Culture Studies (IHCS), Otsuma Women's University. Seven principal investigators and co-researchers presented their research topics, and a question-and-answer session was held with visitors from the floor. The symposium revealed the actual situation of Asia-Pacific cultural exchanges in modern and contemporary times, the role of Christianity, and the contributions Japan has made to the region.

(受付日：2023年5月22日，受理日：2023年6月7日)

**松村 茂樹(まつむら しげき)**

現職：大妻女子大学文学部コミュニケーション文化学科教授

筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科中退 博士(文学，筑波大学)。専門は中国文化論，アジア太平洋国際交流論であったが，2015年度，ボストン大学客員研究員として米国ボストンに滞在し，米国の「個」が「ヨコ」に繋がる「ヨコ社会」に興味をもつ。そして，日本の「タテ社会」を「ヨコ社会」に変革すべく，米国発の「サーバントリーダーシップ (servant leadership：リーダーとして「ヨコ」のつながりを重視し，他者へ仕える精神)」の研究へ新たに取り組んでいる。

主な著書：呉昌碩研究(単著，研文出版) 現代中国語圏映画研究—第五世代と第六世代(単著，Otsuma eBook 大妻女子大学人間生活文化研究所) サーバントリーダーシップの本質(単著，『人間生活文化研究』No.33 所収) ほか。